

Vera Linhartová, *Sur un fond blanc*, Gallimard,
Paris, 1996

稲賀 繁 美

『白地のうえに』という詩的な題名。表紙には、ギメ美術館蔵の桃山時代の屏風。豪華だがいかにも軽やかな色とりどりの和綴じの冊子が散りばめられている。六七八頁の大著。だが威圧感はない。書物そのものが、香箱のような風情で、美術品にみまごう気品をたたえている。九世紀から十九世紀にいたる日本絵画に関する理論書を総覧する研究書に、いかにも似つかわしい、心憎い装丁というほかない。内容は、絵画論を通じ、原典に即して日本の美学の展開を跡づける体系的な試み。日本にも類書をみない、包括的なアンソロジーである。

著者、ヴェラ・リナルトローヴァはチェコの出身。その詩人

には、出版社の良識も窺われる。結論部で日本の時間意識を円環的として、西欧の直線的進化論と対比するのは、いささか図式的で反論を招くかもしれない。また（あまりに豊饒な）明治以降を切り捨てたのは、量的にいたしかたない割愛だろう（これにはさらに同量の一冊を要するが、著者は『前衛の



日本』のカタログで、すでにそうしたアンソロジーを編んでいる。引用された研究者の名前の発音にいくつか誤謬があるが、これも瑕疵に過ぎまい。こうした（いままでも不在だった）基本書の編纂に身を捧げる著者の使命感に敬意を捧げ、本書がひろく仏語圏で活用されることを切望してやまない。

としての才能ゆえに、ミラン・クンデラの信頼も厚い。六八年以来パリに知的亡命をした彼女は、東洋語学校で日本語を修得し、日本のダダやシュール・レアリズム研究に成果をあげてきた。八六年のボンビドー・センターにおける『前衛の日本』の、中心的企画者のひとりでもある。現在は国立東洋美術館研究員となった彼女が、還暦をまえにして問うた大著を、今夏リュクサンブール公園で繙いた。

単なる翻訳集成ではない。厳選されたテクストを読者に呈示するにあたって、各章には充実した導入が配され、さながらそのまま日本美学思想通史たりうる充実ぶりを示している。日本語をフランス語で公刊可能な状態へと矯正す、という作業は、理不尽なまでの苦勞を強いる。いささかなりともその悪夢を体験したほどの者には、フランス語を母国語とはしない学究の、見えざる努力と力量のほどが悟られる。中国画論へもきちんと目配せをしたうえで、日本の独自性の発展を見極め、また西洋からの影響をも排除することなく、佐竹曙山や司馬江漢らによる日本での受容のありかたに、島国の特性を測定する態度には、従来の欧米日本学者の視野狭窄とは無縁な著者の見識も明らかだ。中国語、日本語のインデックスもきちんと完備し、漢字をも付した八〇頁にのぼる索引